

歴方も、中庭廣き端近のところへすまるを住かへ、木馬形を用意し、火のときびしく、立退の道筋とふまで、心を配り、宿酒杯過すべからず、沈酔して物の用にたゞざるのみか、怪我有もの也、格別空低く、星大きく見ゆれば、近きに地震あり、俄に空え、火氣移るは、即刻に地震、火氣飛物となる事もあり、雉子鳴き、衆鳥群をなす故、眼馴ぬ鳥出る事あり、何となく遠く響くは、程なく震ひ來る、又人間は小天地なれば、氣血の順環、天地の氣候と替る事なき故、雷には頭痛し、震に腰なやみ、震雷を的然に知るものあり、男は稀にして女に多し、此類ひにまで心を用ひて前表をさたらば、天災は避すとも、怪我あやまちは有べからず、○中略海なき國は江の水、井の水涸れ溢る、にて知るべし、又佛郎西にて地震を知るために、震刻計を造る、其圖左にあらはす、○圖略

大地震には必二日も前に付もの離れ、少しの地震にも三刻も前に落るといへり、隨分理に叶ひ定てゑるべけれども、先は星の大きく見ゆるを前表第一の規矩とすべし、

〔大地震曆年考〕地震知前兆説我嘉永六年清威豐三年

ナチユルレーキテドキリフトこの書中に見えたり

磁石は、地震を前兆するの一法とす、紀元千八百五十三年の史に、この法を記載せり、夫疾風大雨のごときは、晴雨考をもつて前知する事を得るといへども、地震の前兆を知るに至るは、今日までいまだ世に公明なる事なし、ラツチメントン名也人の佛郎斯國の使として、共和國アルケントンテンス名也國のに至りし時、バレーヌ佛郎斯の大の學校より地震前兆發明の一法を傳送せしなり、その法は、鐵の小片を磁石に附著せしむる者にして、他物を用るにあらず、地震には磁石その鐵に親和するの力、暫時の間消滅するゆゑに、附著の鐵かならず落下す、是をもつて地震の前兆とす、○中略この一大發明はバレーヌの學校を待てはじめて世に知るとおもふ事なかれ、越列機帝利略的多麻窟涅室斯密斯として、親和の理すでに明かになるによつて、學問の